秋の獣医日記

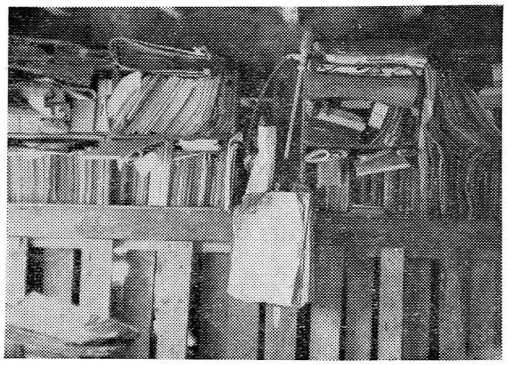
雪印乳業大樹工場　井　上　武　夫

水、水、水

○月○日　暫らく顔を出さなかったK氏が、今日は日やけした顔で事務所を訪れた。今年はどうですか。と切出すと「今年は天候が不順で、よい乾草がとれず閉口しました」と言う。「東京では雨が降らんで水ききんのようだったが、我々は雨が多すぎて凶作だし、仲々旨くいかないもんだ」研究熱心のK氏は後をつづける。…「しかし牛と言うもんは、よく水を飲むもんだね。一体一日にどの位飲むものだろう。うちの放牧場は自然の給水場があるから給水の手間や設備の心配はいらないが、小川のほとりの蹄のアトからみても一日に何回水飲みに行ったか想像もつきませんよ。水ッぽい草をたべているからと言って、牛舎の中でいい加減に給水する訳にはいかない事が解りました。」…と驚いた面持ち、そこで給水の話で以前にこんな事があった事を想い出し、K氏に話す事とした。酪農家T氏宅で起きた話。分娩後、乳量がだんだんふえる筈の牛が逆に減って来たので、どこか具合でも悪いのかと考えてはみたが、飼料もたべるし、給水もしているので、皆目見当がつかない。そこで近所の酪農の大家に相談に赴いた所、大家は水は充分やっとるのか、一日どの位、そして何回位やっとるのかと聞き返した。T氏は、いやいや、水なら充分やっとるし、よく飲ほして居るわいと軽く答えた。そこで大家は、ふにおちないままT氏宅を訪れる事にした。牛舎には二頭で一コの割合で、確かに水槽代りの一斗罐が備えつけられていたし、よく飲んだとみえて、水槽には水はなかった。考えあげた末、大家はT氏にもう一度給水を試みるよう指示した所、結果はどうであろう。意地の悪い隣の牛に完全に独占され、彼女は一滴も恩恵に浴していない事が解った。飲んでいるものと思っていた事が危く愛牛を日干しにする所であったのである。水位がと我々も馬鹿にしがちなものだが…とK氏も肯いて水の力、水の尊さに感服し乍ら、入れ替えたお茶をゴクリゴクリと飲みほすのであった。

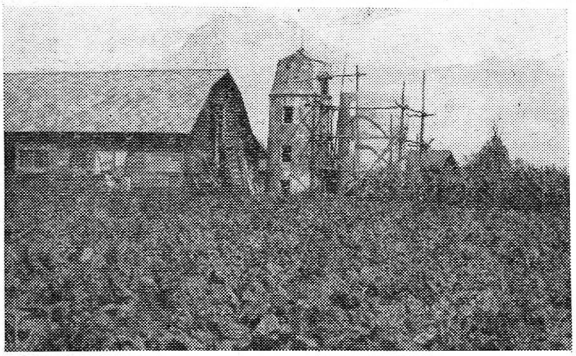
道は一つ

○月○日　往診の帰り途、昨年度の乳量が管内一位であるE氏に、ふと声をかけたくなりハンドルを切る。丁度昼の搾乳が終った所で夫妻はミルカーの後始末をしている所であった。「どうですか、旨く行ってますか」と問いかけると、「まあね」とにこやかに軽い返事。問題の牛もなく、飼料の心配もなく、経営にも無理がない全く羨ましい酪農家E氏の声である。採食中の牛群を見渡し乍ら片隅の休けい室に腰をおろすと、「先月の酪農誌が届かないが一体どうしたんだろう」と言う。工場では毎号輸送罐と共に送るか、部落の会長さん宛に一括して送ってある筈であるが、届かぬ原因がとんと思い当らない。彼はギッシリ整理された参考書の棚から酪農誌綴を取り出すと、前号が綴り込まれていない事に確認を求めた。然しそれにしてもE氏が酪農関係の雑誌、専門書、パンフレットのすべてに隅々まで目を通し要点には傍線をひき、或いは毎号欠かさず熟読しては整理がなされているのには驚いた。（写真1）鼻先にこれを突き出されては「届いていない事はない」、といくらガンバってみても負けである。何かのはずみで届かなかったであろう事を詫びて、帰社後早速届ける事を約束した。数ある酪農家にも色々な型があるものである。E氏の如く次号を待ちこがれている人があるかと思えば、これ等参考書に全然目もくれず、届こうが、届くまいが我、関せずのタイプ。見るには見るが太字の見出し文句だけを読んでテレビの上、棚の上或いは新聞と一しょに積み重ねる所謂、ホットク（放ッ読）タイプ、ツンドク（積ン読）タイプがある。そして大抵の者が勘から生れた酪農を論じ、乳牛を論じ天狗になっているのである。自分の経営をよくしようと



1）熟読された参考書の山（牛舎の片隅）

思えば酪農関係の参考書は山積している世の中、もっとガメツク勉強してもらいたいもの。霧と雨が続いた或る夏の日、H町の農協指導部の担当技師に、このままではカブでも蒔かにや冬が越せんのでないですか。折角ふえ始めた乳牛を売るようになっては……と話しかけてみると、我々指導部でもウルサク言っておるのだが酪農家達は大丈夫だと言っているんですと答えてくれた事を想い出す。そして遂に今年は低温多雨のまま夏が過ぎデントコーンも伸びず、家畜ビートの減収も予測通りであり雑穀同様不作に終った。畑に積まれた乾草も例年より少なく、緑度の低い芳香にかけたものが見受けられる。アチコチで二基目のサイロが立てられているのだが、今冬の中味が



2) 二基目のサイロは建ったが中味が心配

心配である。(写真2) 絶対量の不足と低質が重なれば、乳牛は春を待たずして栄養障害、繁殖障害患者となって我々獣医師を追い廻すのである。或る優秀な酪農家が、**本当の酪農の凶作は冷害の翌年である**と言った事があったがまさしくその通りと思う。今年の北海道の雑穀は半作と報じられているが畑作酪農地帯は結局二年連続凶作になったようなものである。酪農ばかりではないが、勘によって事を進めず常に科学的に、そして臨機応変のかまえをもって進まねばなるまい。日頃の勉強家は、冷害の年に強いのである。酪農をやるには道はただ一つ、質のよい飼料作物を豊富に作り、上手に利用するだけである。多頭飼育の時代だからとて、牛が先か施設が先かを論ずる事もなかろう。何はなくともエサである。そして何時の時代であれ酪農の本質は畜舎や施設をモダンにする事でなく、良質多量の飼料により効率的に牛乳を生産する事にある事をもう一度繰返しておこう。そして各地の一〇〇石会を明年当りから二〇〇石会に格上げ出来るようになってもらいたいものである。

育成専用牧場

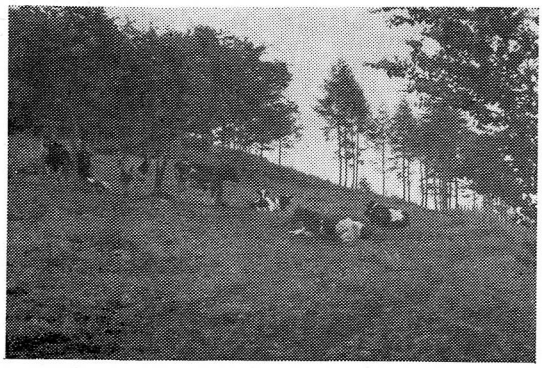
○月○日　報告書類に追われていると、当町名物の一つ、酪農開発事業団の育成牧場を見学したいと言う某町役場畜産係のK氏が見えた。地元に居ながら当牧場の内容を知る機会もないので、この時こそと手帖を胸にK氏を乗せた愛車をとばす。当牧場は仔牛や若牛を民間より買入れて育成し、妊牛に仕上げ酪農家へ還元して行く道営の事業であるが、牧場管理担当のY技師に耳を傾けると当牧場の五年後の目標は、年間の管理頭数五〇〇頭、販売妊牛二五〇頭であると言う。管理は近年注目のルーズバーン（開放牛舎）方式でなされているが、越冬頭数二〇〇頭について言える事は、一頭当り最低一・五坪の牛床は必要であること。放牧時間が多く、適度の運動がなされているためか、繁殖障害牛は殆どない（精液使用量も授精頭数一頭当り平均一―二本である）と言う。しかし発育不良の牛が五%位い出ている。この事は離乳直後の六ヵ月令の頃より月が進むにつれ次第に発育標準を下廻って種付適期には約二ヵ月の差がついてしまい、結局二〇ヵ月で種付となり如何に育成と言うものがむつかしい事であるかを物語っている…と。そこで、育成中に最も注意せねばならない事は何かと聞けば、十三ヵ月令までは半舎飼いとし、放牧にすぎないこと。放牧にすぎると失敗すると言うのである。濃厚飼料は冬期間のみ一日二㌔を与へ夏は無給であるが、要はどの牛も平均して濃厚飼料をとれるような工夫が大切であり、牛群に発生し易いボスはこの意味において大きな問題である。例えボスを取除いてもすぐ第二、第三のボスが出来るのでボスを取除くよりも、弱い牛を引抜いて別に管理する事がのぞましいと言う事である。当牧場では昨年十二月、三十余頭が平均十一万円で売却されているが、当場における採算線は十二万円との事である。又、冬期間に於ける一頭一月当り飼育費が五、〇〇〇円を要するので、一冬二夏で初妊牛として仕上げねば採算に合わない。言い換えれば六月頃までに月令六ヵ月以上の牛を入牧させなければならない訳である。そこで早速放牧中の牛群を見せてもらう事にした。牛群の中ほどに分け入って見渡せば、予想を裏切って毛艶がよく、被毛も短い。肉付きも悪くない。更によい点は後軀、後肢の発達が素晴らしいのである。かしわの木蔭で寝そべり如何にも瞼が重そうな表情で反芻している初妊牛群があるかと思えば、我々に近づき、あとについてくる茶目ッ気の若牛群があり、何等警戒することなく愛撫を求めるかの如く寄ってくるその様は平和そのものである。育成上数群に分けられ、それぞれ放牧地を異にしている訳であるが、一頭当り三反歩の面積が当てられている。Y技師は、育成をやる事は儲からん商売だ。草を作るにしても一㌔当り二円以上かかっては赤字になる。一円五〇銭以下でなければ…と教えてくれた。新聞に当場の経営は苦しいような事が書かれてあったがとK氏が聞くように言うと、Y技師は出してもらえるはずの金が集まらず一時、運営が困難になりましたよ。まともに出してくれたのはY乳業さん位なものですからね。折角此処まできたんですから、もっと投資をしてもらいたいですよ…と答えた。現在種付中のものが七〇頭、妊娠確実なもの二十三頭で今年末に大体六〇～七〇頭が販売頭数となり、二〇〇頭を越冬させるらしいのである。販売妊牛は今までの処、道内で消化しているが、年々販売頭数

が増加すると道外にも出すようになるだろう。今年のように悪天候が続くと仔牛を売って妊牛を、しかも分娩間近のものをほしがる客が多いとの事である。色々と数えられてみれば、一般酪農家はやはり搾乳主体でなければならないし、育成のみをやると言う事には、まだまだ問題が残されていると思えるのである。と同時に、このような育成牧場に於いて更に研究が重ねられ、すぐれた妊牛が数多く送り出される日が一日も早くくるよう、関係機関の助力を要望したいものである。

早期発見

○月○日　最近乳牛の多頭数飼育化はめざましいものがある。数年前の一戸当り平均飼養頭数は、高い所で四頭前後であったものが最近は七頭以上の地帯はざらである。そして全国平均も前年の二・七頭から三・一頭になり、北海道では前年四・四頭が今年は五・五頭と増加している。所で乳牛の疾病の方は第一には獣医学の進歩によってではあろうが、畜主の体験と努力も加わり大きな事故が非常に少なくなり、又未然に防がれているように思えて嬉しいこの頃である。妊娠鑑定と繁殖障害牛の検診で連日追い廻された時代を想い起すと楽になったものである。しかしながら一方、酪農家の畜産技術が向上したに拘らず軽視されがちとでも言うのか、直接的な損害が少ない疾病なるが故か依然として減少線をたどらない疾病が、いまだにある事はさびしい限りである。

第一に取上げたいのは乳房炎、ここ二、三ヵ月間のカルテを開いてみると、乳房、乳頭に関するカードの多いのに驚くのである。直接乳房炎としての往診依頼の他、外傷の患畜もこれ又、乳房、乳頭に関するものが多く、落等乳農家へ原因調査に巡回してみても乳房炎牛を発見するのであるから口がふさがらない。搾乳に要する労働時間を短縮する目的だけでなく、衛生的な牛乳を搾るためにミルカー普及の片棒をかついでいる心算であるが、意外にもミルカー使用農家の方に細菌数が多い結果となっている事には疑問と矛盾を感ずるのである。勿論ミルカーと搾乳器具の洗滌が不徹底のために細菌を増殖させる面もあろう。然し乳房炎の発見が遅れる故に他牛にも蔓延させ、或いはミルカー使用法に適正を欠く故にかかる事態が生じたとあっては、全くミルカーを導入する資格なしと言うよりほかない。扨て日頃我々は酪農家のミルカー使用状況を観察する機会が多いのであるが、最初の搾り捨てが実行されている所は極く稀である。それ故か完全なる乳房炎である事もわからぬまま、乳汁が出ていようといまいと、乳房炎乳であるとあるまいと平然として吸着させているのである。それに装着前の乳房乳頭は簡単に拭くだけであるから、乳房炎の原因になり易い傷も発見されないままミルカーを装着させる事になる。更にミルカーの分解洗滌も、殺菌剤や洗滌剤の使用法もオール略式であるとなれば、乳房炎が減らない理由も細菌がふえる理由もうなづける訳である。労働時間の問題だけをミルカー導入の理由として取上げるとすれば、むしろ導入しない方が利口ではあるまいか、なぜなら落等乳となった場合の損失はミルカーの洗滌殺菌に要する労働報酬より大きいと思うからである。

第二に分娩にともなう事故、お産の事ならまかせとけと言うダンナはどこの部落へ行っても一人や二人はあるもの。所が他人の牛のお産についての自信であって、自分の牛が逆産（さかご）でもしようものなら大騒ぎ、さあ近所の男達を呼べ、獣医を呼べ、ロープをもってこいとあせり早目に足胞を破って娩出を試み、親牛を苦しめ、産道を傷つけ或は仔牛を弱らせ思わぬ失敗をする事が多い。そこでどういう場合も言える事ではあるが初産の時は特に、一旦異常分娩でないかを確認したら、出来るだけ牛自身の力で分娩させるように習慣づけ、人は牛舎から離れていた方がよい事を付言したい。自然に出てくるようになっているものを、御親切に手伝うから牛は頼るようになり、次回から人が手伝うのを待つようになるのである。これから冬に向うのであるが、寒い深夜に分娩し発見が遅れ仔牛を衰弱させる事は多い。この時は臍帯を結さつしてタライのお湯に赤ン坊同様入れて冷えきった体を暖めてやるのも一法である。そこで分娩時間の事になるが体温を測っておけば大体の予測が出来、事故も防ぐ事が出来る。三晩も四晩も牛舎に寝たと自慢げに言うが如きは愚の骨頂である。分娩近くなったら尾根部が落ち込むので見当はつくが、朝夕二回程体温を測定してみると分娩前一〇～一五時間頃から〇・五～一・〇度Cの体温下降があるので、その時こそ注意をすればよい事になる。又生れてくる仔牛にも辛うじて生きていると言う弱いものもある。生れて間もなく死んでしまったとよく耳にする事があるが、これは畜主の油断のように思う。先日助産のため往診した時の弱い仔牛は鼻腔や口腔に附着した粘液（胎水）を乾いた布切れで素速く取り除き、人工呼吸を一〇分間程試み、たすける事が出来たが一応試みるべき事であろう。

以上は軽視されがちなもの、知っておりながら油断しがちなものについて二、三点をのべたのであるが、酪農経営は誰のものでもなく酪農家自身のためのものであるから、小さな事であってもよく勉強して経営にも生かし乳牛の事故も出来るだけなくして、多頭数経営に成功してもらいたいのである。